

## いわゆる「安全弁説」《Safety Valve Theory》について(2)

著者	小林 英夫
雑誌名	関西大学経済論集
巻	11
号	6
ページ	594-620
発行年	1962-02-20
その他のタイトル	On the 'So-called' Safety Valve Theory (2)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/15490">http://hdl.handle.net/10112/15490</a>

いわゆる「安全弁説」《Safety Valve Theory》について (小林)

四二

# いわゆる「安全弁説」《Safety Valve

# Theory》について (一)

小 林 英 夫

## 目 次

### 五、安全弁説批判〔2〕

その一、間接的批判

その二、批判の結論

### 六、反批判とその回答

その一、反 批 判

その二、その 回 答

### 七、論争後の安全弁説

八、あとがき

## 五、安全弁説批判〔2〕

### その一、間接的批判

移住のための諸条件の満たされないことは、たしかに移住の可能性を否定する有力な根拠たりうる。この諸条件

については、クラレンス・ダンホフ氏の論文が詳細を究めている。

条件の第一は、いうまでもなく土地取得であろう。ダンホフによれば、土地の売手として挙げるのは、(1)連邦政府、(2)州政府、(3)公有地を下付されたる会社、(4)私的投機師 (5)部分的に改良されたる土地の私的所有者の五つである。<sup>(1)</sup>

連邦政府の土地処分は売却 *sale* と下付 *grant* の二方法によつており、売却はエーカーあたり一ドル二十五セントを最低価格とする競売と一八五四年以後の等級別価格による私人への売却とである。<sup>(2)</sup> 下付によるものは、主として軍用地払下げによる私人にたいするものと、州または運河<sup>(3)</sup> 鉄道会社にたいするものがある。<sup>(3)</sup> いずれにせよ個人に売却された連邦所有地は、一八五〇年より一八六〇年の間において、連邦地処分総面積の二十四パーセントにすぎず、また個人への土地下付は、その二十五パーセントにすぎない。<sup>(4)</sup> また連邦政府による規制が行われなかつたため、州や会社によつて再処分される連邦下付地は、第一級地ならばエーカーあたり一ドル二十五セントではとても得られない。<sup>(5)</sup>

会社所有地については、たとえば「イリノイ<sup>(6)</sup> セントラル鉄道」は、一八五四年から一八六〇年の間に約一二八万エーカーをエーカーあたり平均十一ドル五〇セントで売却している。<sup>(6)</sup> また私的投機師の役割も重要であつて、一八六二年のアイオワ州センサスでは、州私有地の半分以上(約一、五〇〇万エーカー)は不在所有であり、またその大部分は投機目的のものであつて、価格も普通はエーカーあたり三ドル以上である。<sup>(7)</sup>

部分的改良地は、そのときの条件により、処女地に比してときに有利、ときに不利とされ、その価格も一般には七ドルないし一〇ドルという高値であつた。<sup>(8)</sup> かかる土地の所有者は、純然たる投機師であるか、それとも開墾より

植付けにいたる必要な作業を施してその投資利潤と地価の騰貴とを得ることを目的とする職業的開拓業者であつた。<sup>(9)</sup>

州政府の所有地処分法はさまざまである。(1)会社や投機師のクレジットによる売却、(2)州政府が移住者の道路・排水工事の労務費の支払に発行した土地仮証券 *land script* による土地購入を許す方法、(3)真の移住者への即時無償払い下げ、(4)公定手数料と測量費のみを買手負担とするもの、などがそれである。<sup>(10)</sup>

しかしながら、いずれにせよ土地の価格は、たとえば英人観察者ジェームス・ケアード James Caread のいうように、「もつとも考慮する必要のない事柄」<sup>(11)</sup>であつた。重要なのは、むしろ土地を取得してのち順当な農民生活を営みうるまでの費用である。

まず取得した土地が処女地であれば、(1)樹木を除去し (クリヤング Clearing)、(2)土地を耕し (フレッキング Breacking)、(3)主として放牧家畜の侵入を防ぐために土地の周囲に垣を廻らすこと (フェンシング Fencing) が必要である。

クリヤリングのもつとも安くて良い方法は、樹皮を剥ぎ、樹木を四・五年乾燥させてのちに焼くもので、エーカーあたり五ドルないし八ドルを要する。<sup>(13)</sup> 普通の方法は樹木を倒して二年間ほど放置してから焼くもので、エーカーあたりの費用は一〇ドルといわれる。もつとも手早い方法は、前年の秋に樹皮を剥いで翌春に樹を倒し、最初の乾燥期にそれを焼くもので、エーカーあたり一四ないし一五ドルを要するものと評価されている。<sup>(14)</sup>

ブレッキングについては、連牛の引く特殊のブレッカーで灌木地を耕す場合は、エーカーあたり一〇ないし一二ドルを要する。これにたいして草原の場合は、玄人に請負わせるのが普通で、その費用は土地の性質などによつて

一ドル五〇セントから五ドルまでの開きがあつたけれども、一般にはエーカーあたり二ドル五〇セントであつた。<sup>(15)</sup>  
 つぎにフェンシングについては、「草原農場の場合、垣はその価値の三分の一である」<sup>(16)</sup>といわれるほど重要であつた。処女地の開拓で木材の豊富に得られる場合は、必要なのは労働費用のみであり、それは一ロッド(五ヤード半)あたり三五セントないし七〇セントであつた。したがつて四〇エーカーの土地を囲むのに、三二〇ロッドとして一一二ドルないし二二四ドル、一六〇エーカーの土地では六四〇ロッドとして前記の倍額を要する。木材の得られない草原地帯では、木材を節約するための簡単な杭と横木の垣 *the post and rail fence* が一般に用いられたけれども、木材の価格によつては、一ロッドあたり一ドル以上の費用を要した。<sup>(17)</sup>

農機具については、シャベル、鋤、鍬、鎌、馬具、四輪荷馬車といった標準的なもののみで一〇〇ドル程度の投資を意味する。<sup>(18)</sup> それ以上に望ましい刈取機や脱穀機などを加えれば、それらのみで三七五ドルの追加を意味する。<sup>(19)</sup> 家畜類については、馬・豚・食用飼鳥への最低限の投資に一五〇ドルないし二〇〇ドルを要する。<sup>(20)</sup> また農業を営む上でまず必要とされる種子は、小麦ならばエーカーあたり一ドルないし二ドル、トウモロコシならば小麦の場合よりやや少額の投資を必要とする。ただし棉花を栽培しようとするならば、棉花の種子は、すくなくとも北部では事実上無価値であつたらしい。<sup>(21)</sup>

最初の収獲が待られるまでの入植家族の生活費は、入植の季節によつてもちろん異なる。早春に到着すれば秋の取りいれまで半年を待つにすぎないが、それは、冬に道なき未開地を横断せねばならないため困難である。普通は夏から秋にかけて開拓地に着き、冬までに家を建て、乾草を集めて動物とともに越冬するのだが、この場合には最

「わゆる『安全弁説』《Safety Valve Theory》」(小林)

四六

初の収獲まで一年半を待たねばならない。いずれにせよ第一年目の平均的な家族維持費は、総額一〇〇ドルといわれていた。<sup>(22)</sup>

ダンホフ教授によれば、開拓地までの交通費の一般化はほとんど不可能であるという。フロンティア近辺よりの移住者であれば、その交通費とは時間であつた。そうでない東部海岸よりの移民の場合には、たとえば一八五五年のポストンよりセント・ルイスまでの鉄道運賃は一等で約二十九ドル、平均的移民の利用する等級で十三ドルであり、交通費は大きいとはいえないが無視できない費目である。<sup>(23)</sup>

最後に住居については、材木の安い森林地帯とそうでない草原地帯とでその建設費に相違はあるが、速成のログ・ケビン log cabin は二十五ドルないし一〇〇ドル、もつとも標準的な四部屋付きの家屋で二四五ドルないし四五〇ドル、と計算されている。<sup>(24)</sup>

以上の各費目の計算はまつたくの一般化にすぎず、実際には地方により、また算定者を異にするにより、その値はさまざまである。ダンホフ氏は、それを別表のような便利な一覧表に集約している。その結果かれは、西部農民となるための文字通り最低限の費用を一、〇〇〇ドルと見積つている。<sup>(25)</sup>五十年代の普通の労働者の一般的賃金が一日一ドルにも達せず、またエドワード・ヤング Edward Young のいうように熟練労働者の賃金として一日一ドル半ないし二ドルにすぎなかつたことを想い起すと、かれらが年に五〇ドル以上の貯金をなしうるとは、とても期待できない。<sup>(26)</sup>かくてダンホフ教授は、労働者の西部移住の可能性について、はなはだ否定的である。

Estimated Costs of Farm-Making: 1850~60

Location	Total Cost	Size Acres	Land Cost	Break-ing	Fenc-ing	Seed-ing	Harv-esting	Live-stock	Pro-visions	Build-ing	other
California	2,000	640	800	+	600	+	+	500	100	*	+
California	3,000	40	400	+	1,400	200	+	700	+	+	300
Illinois	550	40	50	+	100	20	+	140	50	20	170
Illinois	785	80	100	130	320	40	195	+	+	+	+
Illinois	896	34	170	87	100	468	71	+	+	+	+
Illinois	920	200	320	+	173	+	+	+	+	100	27
Illinois	930	45	500	+	+	20	+	140	50	+	220
Illinois	1,411	80	360	150	400	145	456	+	+	+	+
Illinois	2,100	160	1,000	400	400	+	+	+	+	300	+
Illinois	2,127	80	1,200	175	320	236	196	+	+	+	+
Illinois	2,290	320	240	1,500	+	*	*	+	+	*	550
Illinois	2,750	160	1,600	225	400	+	+	+	+	500	25
Illinois	2,800	100	1,000	1,250	*	*	*	+	+	+	550
Illinois	12,200	640	6,400	1,300	1,200	800	2,500	+	+	+	+
Iowa	440	40	50	80	160	+	+	+	+	+	150
Iowa	850	160	200	320	320	+	+	+	+	+	+
Iowa	1,034	80	+	+	+	+	+	310	+	450	374
Iowa	1,500	80	250	75	75	75	+	200	100	100	550

Lowa	2,650	160	200	600	600	150	200	+	+	+	650	250
Iowa	3,000	400	1,400	180	300	+	+	305	+	+	150	665
Michigan	277	40	+	220	40	17	+	+	+	+	+	+
Michigan	2,475	160	225	1,012	*	*	338	+	+	+	900	+
Minnesota	705	160	200	+	+	+	+	315	+	+	73	117
Texas	500	100	200	+	+	+	+	50	+	+	50	50
Texas	715	50	150	+	60	150	+	260	+	25	65	+
Texas	1,000	160	400	+	+	+	+	150	+	150	150	150
Texas	7,800	160	400	*	600	+	+	4,450	+	+	750	1,600
Texas	9,000	1,000	2,500	*	500	+	+	5,250	+	+	750	+
Wisconsin	1,690	200	250	480	400	160	400	+	+	+	+	+
Wisconsin	2,000	640	800	100	200	+	+	350	+	150	*	400
Wisconsin	2,500	100	1,600	*	*	+	+	560	+	100	*	250

1. \*印は、その項目が先行する数字のなかに含まれていることを示す

2. +印は、その項目が計算のなかに含まれていないことを示す

3. 上記の表は、31人の観察者の推定である。すなわちカリフォルニアについては2人、イリノイについては12人、アイオワについては6人、ミシガンについては2人、ミネソタについては1人、テキサスについては5人、ウイスクオンジックについては3人である。かれらの名前は略す。

Clarence Danhof, Farm-Making Costs and the "Safety Valve": 1850~60, in the *Journal of Political Economy*, Volume XLIX, June 1941, P.327

註(一) Clarence Danhof, *op. cit.*, p. 329

(2) *Ibid.*, P.329

(3) *Ibid.*, PP.329~330

(4) 一八五〇年から一八五九年にいたる連邦地の処分面積は二〇七、〇〇〇、〇〇〇エーカーであるが、その内訳はつきのごとくである。( *Ibid.*, P.330)

個人への売却	五〇、〇〇〇、〇〇〇エーカー	二四パーセント
個人への下付	五二、〇〇〇、〇〇〇エーカー	二五パーセント
州への下付	七六、〇〇〇、〇〇〇エーカー	三七パーセント
会社への下付	二八、〇〇〇、〇〇〇エーカー	一四パーセント
計	二〇七、〇〇〇、〇〇〇エーカー	一〇〇パーセント

(5) *Ibid.*, P.331

(6) *Ibid.*, P.332

(7) *Ibid.*, pp.332~334. ただし合衆国連邦土地局は、投機を重視せず、一八五七年のその年次報告では処分された土地の四分の三は実際に定住されているとのべ、一八五九年の報告でも、同様のことを主張している。けれどもブキャナン大統領は、そうは考えていなかったようである。一八五七年の年頭教書のなかで、「投機は最近公有地に広汎にひろまつた。その結果土地の大部分は私人や株式会社社の財産となり、かくしてその価格は、真の定住のための土地買入れを望んでいる人々にたいして、はなはだしく騰貴することとなつた」と。

(8) *Ibid.*, P.336

(9) *Ibid.*, P.334. なお部分的に改良されたる土地とは、*breaking, fencing, building, cropping* がすでになされてしまつてゐるものをいう。

(10) *Ibid.*, PP.337~338. なおここにいふ四つの処分方式のうち、第一の方式では、信用期限は通常一、二年であるが、「イリノイ州セントラル鉄道」により与えられた信用は六年の長いものであつた。第二の方式をとつた州はメイン州やアーカンソー州である。第三の方式の例は、アーカンソー州とミシガン州とにみられる。第四方式は、テクサク州が一八五三年以後実施したものである。

- (11) *Ibid.*, P.339
- (12) Fencing の意義としては、つぎのようなことが考えられる。(1)自然のままの耕地は家畜にとつての自由地であつたけれども、それは、常に成長する作物にとつては脅威であつたこと (2)各州の法律によれば、他人の所有する家畜によつて蒙つた損害にたいして弁済を求めるとして、垣の有無が問題とされたことなどである。  
(*Ibid.*, P.344)
- (13) *Ibid.*, P.340 ただし、この方法では枯死した樹木の間に播種できるけれども、枝や幹が落ちてかなりの損失をもたらすおそれがある。
- (14) *Ibid.*, pp.340~341 だがこの方法には、(1)たえず新芽を出す若い切株に何年も邪魔されるし、(2)またそのために樹皮の剥がれた木の根を掘り返すに要するよりも数年も長く耕さなければならぬ、という欠点がある。
- (15) *Ibid.*, pp.341~344
- (16) *Ibid.*, P.345
- (17) *Ibid.*, pp.345~346 要所々々に太い杭を立てて横木を配した the post and rail fence と対照的なのは、いわゆる the Virginia rail fence であつて、これは別名 snake fence とよばれるように、荒く削つた横木の一端を他の横木の一端に一定の角度でつけてつくつたジクザクの形の垣のことであり、材木を多く必要とするために材木が豊富に安く手に入る場合に用いられた。
- (18) *Ibid.*, P.347
- (19) *Ibid.*, P.348 これは、パーカーなる人物の一つの評価にすぎず、最低必要農機具の品目をどう選ぶか、またその価格をどう評価するかによつて、最低費用の例はさまざまである。なお種子条播機 (seed drill) は、五〇年代には主としてミンシッピー河以東の地に限られていたけれども、次第に西部でも望ましいものとされ始めていたし、刈取機 (the reaper) のときは、西部の労働力供給の過少のために、基本的なものと考えられた。脱穀 (thrashing) は、第三者に請負わすのが普通であつた。かくして農業の機械化を伴はずして、土地は、投機的価値を別とすれば、ほとんど無価値であつた。( *Ibid.*, p.347 )
- (20) *Ibid.*, P.349

- (21) *Ibid.*, P.350
- (22) *Ibid.*, P.351
- (23) *Ibid.*, PP.352~353 (24) *Ibid.*, P.353
- (25) *Ibid.*, P.354 (1) なお定住費用について、英国人ウィリヤム・オリヴァーなる人物の一八四三年における概算がある。すわなち

* 交通費 (ニュー・ヨークよりセント・ルイスまで)	
一、フィラデルフィヤルビッツパーク経由……………	食事つき
	四一・五〇ドル—五八ドル
	食事なし
	一三・〇〇ドル—二〇ドル
二、アルバニー—バッファロー経由……………	食事なし
	一六・〇〇ドル—二一ドル
	四三九・七七ドル
* 家屋 (家具をふくむ)……………	一、二七七・六〇ドル
* 農場……………	一五七・五〇ドル
* 土地開墾のための附加的用具……………	
のごとくである	

[2] またホームステッド法通過後の一移住者による費用概算はつきのごとくである。

* 夫婦と子供二人の最低交通費	一〇〇ドル
* 少くとも二頭の連牛 (首木でつないだもの)	一〇〇ドル
* 四輪馬車一台	一〇〇ドル
* 最初の収獲までの半年の食糧 (一日五〇セント)	九〇ドル
* 必要なる農機具	一五〇ドル
* 最初の収獲のための種子	一〇〇ドル
* 乳牛一頭	五〇ドル
計	六九〇ドル

以上の二例は、すなわち Goodrich and Davison, 'The Wage-Farmer in the Westward movement' II, in

らわゆる「安全弁説」《Safety Valve Theory》について (小林)

五二

*Political Science Quarterly*, 1936, pp. 91~92

(26) Danhof, *op. cit.*, P.357 また西部での機会と最も密着してゐる農業労働者にしても、一般に食事と部屋代とは別として、収入は年に一五〇ドルにすぎなかつた。なお、移住の資金源は、通常は現金貯蓄または財産売却による現金収入であつて、とくに財産の流動化は、東部の農民たちが西部移住のための現金資金を生みだすための共通の方法であつた。(Ibid., P.356)

### その二 批判の結論

かくして安全弁説の批判は、つぎのように要約することができる。

(1) 現実の事実として、社会的圧力を減ずるといえるほどの西部への労働移動がおこなわれたという証拠は、存在しない。また現実に移住したと思われる少数例についても、記録の示すところでは、その多くは定住に失敗している。

(2) 西部移住の可能性の点からみても、移住入植に要する諸種の費用(最低限一、〇〇〇ドル)を弁ずることは、当時の賃金労働者の賃金水準を前提にしては考えられない。

以上の二点は、さらに証拠をもつて固めることができる。その第一は、賃金労働者の農業知識の不足である。一八五七年のニュー・ヨーク・トリビューン紙にその警告がみられる。

「農業は、他の仕事とおなじく知識、経験、および熟練を要する仕事である。都市で生れて育つたものが三十才ないし四十才にして農場に移り、すぐに能率的で質朴かつ有望な農民となることなど、だれもできるものではない。」<sup>(1)</sup>

と。農業専門家のジョージ・ゲッズ氏 George Gaddes の

「農村で生活したことなしに都会生活より直ちに移住し、未熟の考の赴くままに自己の手労働にもつばら依存する人々の営む農業が、成功した例はほとんど示されえない。」<sup>(2)</sup>  
と説いている。

第二の証拠は、いささか趣きを異にする。フレデリック・シャノン教授の指摘しているように、安全弁の減圧作用という通念化された主張にもかかわらず、失業は一向に減じた風がない。「失業が一八六五年から十九世紀末葉にいたる各十年間の一大経済疾患だったことは、否定されえない」<sup>(3)</sup> 事実である。したがって自由地は、その意味ではなんら問題を解決しなかつたと思はれる。

第三に、東部過剰人口の大半は「公有地に憧れうる距離内にさえいなかった」<sup>(4)</sup> といつてよく、十九世紀末の「合衆国産業委員会」の報告によれば、開拓民は一般に東部および南部諸州出身のアメリカ生れのアメリカ人であつて、かれらは「子供にそれぞれ農場を遺としてやれる」ように、「新しい土地に大きな農場をかうために、その小さな農場を売り払つた」農民であつた。<sup>(5)</sup>

第四に、土地投機の慣行の一般的なことについてはダンホフ教授も述べているところであるが、さらに一八九一年のホームステッド法修正（公有地取得の条件として実際の定住がかならずしも必要でなくなつた）のために一般人の土地投機が盛んとなり、かくて広大なホームステッドは、現実の定住を意味しなかつた。<sup>(7)</sup>

以上のような理由や証拠のために、グッドリチとデヴィソンの二人にしても、またダンホフやシャノンの両教授にしても、ともに自由地の減圧作用を否定したのである。しかし問題はその否定の度合である。いいかえれば安全弁はまったく開かなかつたのか、それともその開き方がわずかであつたのかである。この点で上記の四人は、多少

いわゆる「安全弁説」《Safety Valve Theory》といふこと（小林）

五四

のニュアンスの差はあるにせよ、その結論はまったく一致している。

グッドリチとデヴィソンはいう。

「しかしながら、われわれが安全弁説を受けいれないのは、ターナーやその追従者たちによつて述べられてきたところの直接の言葉とおりの形態においてである」

「安全弁はここでは労働者よりはむしろ農民のそれであつたけれども、その作用が産業賃金の水準を上昇せしめる傾向にあつたことをわれわれは疑う必要はない」<sup>(8)</sup>

と。またシャノン教授はいう。

「諸君の弁は肝腎のときに作用しない習性をもつており、その反対に圧力の高くないときですから労働の細い流れを放出しているのであるから、……それを南京豆焙り器のなかの笛と呼んで満足していただきませう」<sup>(9)</sup>

と。ダンホフ教授の結論も同様である。

「西部での農場設置の費用を考えると、西部の農場設置の機会を、東部賃金労働者の地位を直接に決定したものとみなすことは、明かに誤りである。これは、東部賃金労働者が実際に西部移住に参加した範囲内において、東部で高賃金が支払われる結果をもたらしたものとしてみ可能である」<sup>(10)</sup>

「……かかる影響（安全弁のそれ）は、確かにまた明かに第二次的であつた」<sup>(11)</sup>

と。いいかえれば、かれらは、安全弁説そのものよりはフレデリック・ターナー製の安全弁に挑戦していたのである。しかもかれらは、その点でまったく腕のよく利く職人たちであつた。

註(一) *New York Tribune*, April 8, 1857, in Goodrich and Davison, 'The Wage-Farmer in the Westward Movement' II,

(c) *Ibid.*, "Farmer's Extra," Supplement, 1878, in *op. cit.*, P.90

(co) Frederic A. Shannon, "The Homestead Act and the Labor Surplus" in *American Historical Review*, 1936, P.651  
 たとえば人口の増加した一八六〇年—一八九〇年に工業人口は三・二五倍の増加をしめし、人口の六三・五パーセントの増加をしめした一八七〇年—一八九〇年に、工業人口は倍加したが、農業人口の増加はわずかに四十五パーセントにすぎない。しかも一八七〇年代や八〇年代の農業危機には都市失業者はたえず増加し、かのヘンリー・ジョージやゴッドウィン・ムーディの描くごとき現実が発生する。キャロル・ライト博士の推定では、専門職業と個人サービス業をのぞく一八八五年の全失業者は九九八、八三九人であり、あらゆる種類の失業を含めれば、それは一、三〇〇、〇〇〇人以上となる。一八八四年から八五にいたるマサチューセッツの失業率は二九・五九パーセント(二四一、五八九人)とされる。( *Ibid.*, Pp.648~651) また信頼しうる一資料によれば、一八六八年のニュー・ヨーク市には、少くとも二万人の失業者がいたとされている。(J. R. Commons, *History of Labor in the United States*, Vol. II, P.123)

(4) Shannon, *op. cit.*, P.645 一八六二年にまだ公有地の残存していた二九州のうち、ミシシッピ河以東にあるのは、わずかに八州にすぎない。また一八六〇年の第八回連邦センサスによれば、三四州のうちの三〇州において、移民の定住地は、かれらの生誕州の隣接州であった。この傾向は、その後も変わっていない。

(5) *Ibid.*, P.646 また「その運動は、農場から農場へ、またはのちに見られるように農場から都市へであった。都市から農場へ—労働者の小屋から農場への動きは稀であった」と。

(6) Clarence Danhof, *Farm-Making Costs and the 'Safety Valve': 1850~60, in the Journal of Political Economy* PP.332~334

(7) Shannon, *op. cit.*, P. 647 一八六二年のホームステッド法は、投機を目的としない真の移住者は五年間定着して開拓を行うことを条件として、一六〇エーカーの土地を無償で与えることとしたものである。これは、一八七〇年にいたり、従軍者には五年間定着の条件が免除せられるにいたつた。一八九一年のホームステッド法修正は、名目上十四ヶ月、実際上は八ヶ月の定住を条件として、その後は公有地を金で買いうることを一般化したもので、これは、大いに投機を刺激することとなつた。一八八二年から一九〇四年にいたる間に、一三九、〇〇〇人が二、〇〇〇万エーカーのホームス

「安全弁説」《Safety Valve Theory》について (小林)

五六

テッドを金銭にて取得しているが、一部の地方では、取得された土地の十分の九が、所有権確保ののち三ヶ月以内に処分されている。かれらのなかには、カナダ人あり、また投機目当ての他の外国人あり、さらには休暇の数ヶ月の間に前述の方法で副収入の途をはかった女教師のごとき婦人連があつた。

(8) Goodrich and Davison, *op. cit.*, P.115

(9) 一九三七年四月のミシシッピ—溪谷歴史協会の会合におけるシャノン教授の発言。ただし Goodrich and Davison, "the Frontier as Safety Valve: A Rejoinder", in *Political Science Quarterly*, Volume L III, June 1938. P.271  
45。

(10) Danhof, *op. cit.*, P.359

(11) *Ibid.*, P.359

## 六、反批判とその回答

### その一 反 批 判

批判のすざましさに比較すると、ジョセフ・シェファー博士の反批判は、<sup>(1)</sup>健気ながらもいささか悲壮である。博士は、もつぱらグッドリチとデヴィソンの方法論を攻撃している。

すなわち (1)両氏は当時のアメリカの各界において安全弁説が遍く信ぜられていたことを認めながら、新聞の沈黙を理由としてそれを否定する。これは、アルグメンタム・エクス・シレンチオ the argumentum ex silentio という論理的に危険な方法である。(2)奇妙なことに両氏は、アメリカ植民時代の最大の安全弁論者ベンジャミン・フランクリンをまつたく無視している。(3)両氏の依拠した資料は、新聞以外ではまつたく限定されている、<sup>(2)</sup>というのである。

第一の論点について、シェファード博士はいう。新聞記事を証拠とすること自体が問題である。なぜなら、通常の西部への移住は個人や家族、親類、友人などを単位とする静かな移動であるが、これらは通常の新聞編集者のニュース関心の対象とはならない。したがって新聞記事からは、平凡な移住は探せない。<sup>(3)</sup> また賃金労働者 *wage-earner* についての両氏の定義は明確でなく、かれらはそれを工場労働者に限定して独立の職人 *craftman* や農業労働者を排除しているが、職人なるものの実態より判断すれば、職人を *wage-earning* の範疇より除くことは正しくない。<sup>(4)</sup> なお両氏の主張にもかかわらず、工場労働者が農民となつた例を挙げることができる。<sup>(5)</sup>

第二のベンジャミン・フランクリンについては、かれの一七五一年の植民に関する観察が引用されている。またアレクサンダー・ハミルトンも引用されている。<sup>(7)</sup>

第三の資料の点については、重要な連邦センサスの利用されていないことや、また郡の歴史が正しく利用されていないことが非難されている。<sup>(8)</sup> シェファードによると、センサスの示すところでは、ウィスコンシン州のかなりの数のタウンの一八八〇年時の農民の二五ないし六〇パーセントは、三十年前は労働者か職人であつたことになる。<sup>(9)</sup> またミネソタ州の各郡についてのエドワード・ネイル *Edward D. Neill* 氏の歴史によると、一八八一年のダコタ郡の全農民の一七・九パーセントにあたる三三五人の前歴は、五五人が職人、五六人が農業雇人および借地農、六八人が普通の労働者であつた。<sup>(10)</sup> なお農業労働の知識と経験の欠除という点については、デ・ハース *De Haas* の言葉を引用し、必要なのは、知識と経験よりは意欲と能力と体力であることを強調している。<sup>(11)</sup>

このようにしてシェファード氏は安全弁の作用を肯定するのであるが、しかしその表現はかなり微妙である。かれは、批判者たちのなかには、「その満たされる可能性の存しないほどの強い要求を『安全弁』に求める」<sup>(12)</sup>もの居

いわゆる「安全弁説」(Safety Valve Theory) (小林)

五八

ることを非難し、相対的にみるならば安全弁は「いちぢるしい成功であつた<sup>(13)</sup>」という。そしてグッドリチとデヴィソンの両氏すらも、フロンティアヤーが産業賃金水準をひき上げる傾向にあつたことを認めている点を衝く<sup>(14)</sup>。しかも最後に「安全弁といわれてきたものの影響は多分に心理的なものであつて、労働者、使用者および一般大衆にひとしく作用してきたことは確かである<sup>(15)</sup>」と結論している。いわば批判者たちとシェファアとの相違は、非常に截然と区分することがむずかしいのである。

註 (1) Joseph Schafar, "Concerning the Frontier as Safety Valve" in *Political Science Quarterly*, Volume LII, September 1937, Number 3

(2) *Ibid.*, pp. 407~408

(3) *Ibid.*, p. 412

(4) *Ibid.*, pp. 413~414 職人は、のちには独立の自営業者となるにしても、それまでは熟練を売るところの賃金稼得的労働者である。いわば wage-earning skilled workers であつた。また当時の外国人観察者たちも、その話しあつたフロンティアヤー農民が以前は wage-earning craftsman であり、不況により西部移住をおこなつたものであることを、報じている。

(5) たとえば、一八四八年マサチューセッツ州のロウエル市で、当市で名ある工場に働いていた若い婦人たちが貯金をして六〇〇ドルを溜め、結婚して独立の農場を営むべく夫とともに西部に向つたということを、マッケイなる人物がのべている。これについてシェファ博士は、これではあまり「大きつばにすぎる」けれども、ロウエルの場合は、ニュー・イングラントの農家の子女が、そういう考えから工場に働いていたのであるから、この例は、典型的なものであるうと考えている。またシカゴ市で勤務していたジェームス・アレン大尉は、一八三五年九月三〇日に上官のチャールズ・グレイショット將軍に、つぎの手紙を書いている。労働者たちは、「……………一日一ドル五〇セントないし二ドルの賃金率で働き続けるのを拒み、ミルウォォーキーかいずこかへ行つて、公有地が市場に売りだされるときには最低価格でそれを入

- 手せんと的確固たる確信をもつて、公有地に居を定めた……」と。(Ibid., pp. 415~416. & footnote)
- (6) たとえばフランクリンはいう。「(フロンティアヤーの)この保健的効果は、移住がなくなるとも生みだされるだろうし、移住のたんなる可能性の結果としても生じるであろう。……」(Ibid., p. 409)
- (7) ハミルトンはいう「独立の土地所有者たらんとする欲求は、人間の心の中の非常に強い原則の上に築かれているので、かくたりうる機会が合衆国におけると同じほど大きいところでは、さもなければその地位が独立土地所有者となるに至る人々のうち、それより工業へと転ぜしめられるであろうものの割合は、小さなものであらう」と。(Ibid., p. 411)
- (8) 西部の農民の起源を調べる上で重要な二つの資料がある。その一つは、グッドリチとデヴィソンの両氏によつて無視されたものであつて、すなわち the manuscript federal census である。これは年次の相異なるセンサスの比較によつて、同一人物の職業の変化を知ることが出来る故に有用である。他は、county history であつて、両氏はこれを調べたものべているが、そのなかのものとも生きた資料、すなわち農民の伝記的スケッチを、かれらが利用したという証拠はな5。(Ibid., pp. 416~417)
- (9) Ibid., p. 417
- (10) Ibid., p. 417. なおシェファーはいう。アイオワ、ネブラスカ、カンサス、イリノイの記録を綜合すれば、一八八〇年前後の中西部農民の三分の一は、一般労働者または熟練労働者とその前身であつた。(Ibid., p. 418)
- (11) Ibid., pp. 418~419 及び一八四七年に De Haas はいう。「仕事はすべて、ここでは非常に簡単である。そして農業を学びとうと切望しているものには、よき農民というものは真に教えがいのある全く未経験の移民より速やかに生れ得るものだということを、経験ある隣人が非常に熱心に教えてくれるだろう」と。
- (12) (3) (14) Ibid., p. 419
- (15) Ibid., p. 420

## その二 その 回 答

シェファーの反批判が発表されると、グッドリチとデヴィソンとは、その翌年直ちに短い回答文<sup>(1)</sup>を書いている。そ

らわゆる「安全弁説」《Safety Valve Theory》について (小林)

のなかで二人は、シェファアの論点の一面の正しさを認めながらも、なんら自説を修正または撤回していない。

第一に、アルグメンタム・エクス・シレンチオという方法論上の批判にたいしては、その論理的危険性は多分にあるとしても、賃金労働者の西部移住についての証拠の沈黙が有力な証拠によつて破られないかぎり、大量の労働移動はなお疑問視せざるをえない。<sup>(2)</sup>

第二にフランクリンについてのシェファアの指摘は、すみやかに譲歩されうる。しかし安全弁批判の目的のひとつは、事実としてではなしに思想としての安全弁の「遍在」ubiquityを示すことであつたから、フランクリンやハミルトンからの引用は、かえつてその遍在を証明するに役立つにすぎない。<sup>(3)</sup>

第三の資料の点については、依然として「謎」(the crux)である。グッドリチとデヴィソンの関心は西部の農民となつた東部の賃金労働者であつて、移住者一般や西部の賃金労働者についてではない。<sup>(4)</sup>したがつてシェファアのいうところの西部農民となつた西部の職人や外国移民労働者の例は、一向に問題を前進させない。<sup>(5)</sup>エドワード・ネイル氏のいうダコタ郡の労働者前歴をもつ農民についても、前居住地が明らかにされねばならない。<sup>(6)</sup>またセンサスの利用は、一郡内での労働者の農民への転化を示すには役立つとも、たとえばマサチューセッツ州の一職工がウィスコンシン州の一農夫となつたことを示すには役立たない。<sup>(7)</sup>また農業労働の修得についてのシェファアの主張は、たんなる可能性の問題であつて、現実の労働者がそうであつたという事実を証明するものではないと。<sup>(8)</sup>

グッドリチとデヴィソンとは、以上のような回答をおこなつていゝるのではあるが、シェファア博士のいう「もつぱら心理的なる」効果については、自分たちこそ安全弁の効果をかかふるものに限定したのだと論じている。<sup>(9)</sup>このよつてみると、前にもふれたように、この論争当事者間の相違は、結論の相違をめぐるものというよりは、類似

の結論にいたる道程上の手続きの是非をめぐるものといふことができる。いわば論争は、ターナー説の根本的な修正という時流のコップのなかの嵐であつた。

註 (1) Goodrich and Davison, "The Frontier as Safety Valve: A Rejoinder," in *Political Science Quarterly*, Volume LIII, June 1938.

(2) *Ibid.*, p.270

(3) *Ibid.*, p.268

(4) (5) *Ibid.*, p.268

(6) (7) (8) *Ibid.*, p.269 また移住者の子供の出生地を調べることにより移住者の移住ルートを知る方法は、独創的ではあるけれども、それはそのルートの一部分しか示さないであらう。

(9) *Ibid.*, p.270

## 七、論争後の安全弁説

既存の権威にたいする挑戦が勝利を収めるためには、挑戦者みずからが、新しい権威として古きに代りうるものをもたねばならない。その意味ではターナーへの挑戦者たちは、そのすぐれた資質をもつていたといえる。その透徹せる論理と豊富な証拠とは、ターナー教授の仮設を破くに充分であつた。したがつて論争後にあらわれたアメリカの経済史や労働運動史の研究が、その影響を多かれ少かれ蒙つたのは当然のことといえる。<sup>(1)</sup>

たとえばアーネスト・ボガートとロナルド・ケメラーの二人は、その一九四二年の「アメリカ人の経済史」のなかでいふ。

「さむゆる『安全弁説』」 Safety Valve Theory (小林)

「わゆる『安全弁説』(Safety Valve Theory)に於て」(小林)

六一

「広大な拡がりをもつ西部の廉価な土地が、アメリカ人の経済史におよぼした影響を誇張することは、ほとんど不可能である。……非常にしばしば主張されるように、廉価な土地を不況時の安全弁とみなすことは誤りであろう。ミシガンまたはウィスコンシンの廉価なまたは自由ですらある土地が、たとえばプロヴィデンスまたはフィラデルフィアの失業せる織工にとつて、とるに足らぬ慰めであろうということは、ちよつと反省しただけでも了解できる。……」<sup>(1)</sup>

と。キャロル・ドガティー氏の一九四一年の「アメリカ産業の労働問題」も、

『……………けれどもひとは、自由地の提供する機会をだれでも利用できたと思像してはならない。多くのものは強い束縛を有したために、振いたつて去ることは不可能であつた。家族的束縛、諸困難、旅行の危険は、労働人口の完全なる移動性の障碍であつた。他に自由地の心理的効果があり、それは間接的に労働問題と関係があつた』<sup>(2)</sup>

という。ただし他の箇所では、自由地の効果をかなり認めている文章が散見できる。<sup>(3)</sup>

安全弁批判のすぐれた論客だつたフレデリック・シャノン教授は、その立場よりして当然のこととはいえ、その一九四七年の著述のなかで次のような断定を下している。

「西部の土地が労働過剰を救済し、かつアメリカにかなりの労働者階級が発生して以来、それが安全弁として作用したということとは、もはや真面目には信じられていない。たしかにホームステッド法は、かかる奇蹟を働かせなかつた」<sup>(4)</sup>

と。おなじく一九四七年のルイス・ハッカー教授の「アメリカ資本主義の勝利」もいう。

「西部の土地は、われわれのみるように、いかなる実際の意味においても自由ではなく、かくて完全なる非所有者がたんなる移住によつて草鞋がけで立ち直るといふことは不可能であつた。」<sup>(5)</sup>

「かくして都市産業労働者は、西部を約束された土地として物欲しげに眺めたものの、その門は、実際にはかれらに閉ざされ」<sup>(6)</sup>

と。またフィリップ・フォーナー博士は、その名著「合衆国労働運動史」のなかで、安全弁説についてかなり長く論じている。マルクシズムの立場からしてターナーのフロンティア仮説に批判的なのは当然の帰結かもしれないけれども、その批判は非常に慎重である。

「しかしながら、かなりの数の労働者が、土地改革をば労働者階級を向上せしめる計画と考えたかどうかは疑わしい。たとえ欲したにしても、西部へ行きえた労働者は、非常に少なかった。……………」<sup>(7)</sup>

「すべての労働者がこの点（安全弁効果のこと）に同意したわけではない。一八五七年の失業者の大衆集会のとき、労働者たちは、西部への移住に全力を集中すべきであるとの提案をひっこめた。」<sup>(8)</sup>

「この問題についての近年の研究者たちによつて提供された証拠は、労働者の西部への移動はほとんどなかったことを示しているけれども……………」<sup>(9)</sup>

と。この最後の引用文の讓歩形態からも判断できるように、フォーナーは、安全弁説を批判しながらも、「フロンティアの存在が労働運動の発展に真の重要な影響をおよぼし、また労働者階級の状態とイデオロギーにいちぢるしく影響したという事実」<sup>(10)</sup>を明確に認識しているのである。

以上の五例は、三十年代後半の安全弁説批判の結果をしめす若干の例にすぎない。けれども、それらは、安全弁にかんする現在の思想の大勢を示すものといつてよい。もちろん労働運動史家のフォスター・ダレスやヘンリー・ペンダなどは、かならずしも上述の大勢に賛成していないけれども、しかし真向から反対しているわけでもない。いずれにせよ、グッドリチとデヴィンソンの努力は、その熟れ方に程度の差こそあれ、多くの実をみせたとはいつてよい。

らわゆる「安全弁説」(Safety Valve Theory) (小林)

六四

- 註 (1) Ernest L. Bogart and Donald L. Kemmerer, *Economic History of the American People*, 1942. pp.227~228
- (2) Carrol R. Daugherty, *Labor Problems in American Industry*, 1941. P.38
- (3) 「労働問題にたいする自由地の経済的效果は、より直接的であった。それは、賃金およびその他の労働条件を規制するものとして作用した。……賃金は、労働者の稀少とともに上昇し、通常はヨーロッパの同様な労働者のそれよりもはるかに高かった」と。(Ibid., P.38)
- (4) Frederic Albert Shannon, *America's Economic Growth*, 1947, P.369
- (5) Louis M. Hacker, *The Triumph of American Capitalism*, 1947, P.201
- (6) Ibid., P.203 けれどもハッカー教授は、つぎのように条件を附している。「……西部を『安全弁』とみるやや粗雑なる理論、すなわち西部が起るかもしれない社会的不満にたいする安全装置として、また固定化しようとする階級社会の矯正者として作用したという説にたいするこの修正は、けれども、平等化の力としての西部の役割を重視する考え方を決して侵害するものではない」と。(Ibid., P.202)
- (7) Philip S. Foner, *History of the Labor Movement in the United States*, 1947 Volume I, P.187
- (8) (9) (10) Ibid., P.442
- (11) フォスター・ダレス氏は、つぎのように安全弁説を明言する。「フロンティアは、その廉価な土地をもって、たえず大西洋沿岸を涵らしたのである」。(Foster Rhea Dulles, *Labor in America: a History*, 1950, P. 11) 「……その拡大するフロンティアは、この時代(十九世紀前半のこと)において、廉価なる土地の容易なる利用可能性または西部定住地で一つの職業を営むための大なる機会に魅せられたる多数の労働者をひき去りつづけた」(Ibid., P.25)。もちろんダレスは十九世紀末には安全弁の閉ちつあつたことを認めるけれども、「フロンティア社会の独立と個人主義とは、十九世紀のアメリカ労働者が賃金労働者たることを永久に受け入れることを、その反対のあらゆる証拠にもかかわらず、ほとんど不可能たらしめたのである」と。(Ibid. P.98)
- (12) ヘリングは、とくに十九世紀前半について、「……かれらの移動は、東部に留まつた労働者の地位を少くとも容易にし、かれらをして、ヨーロッパよりの新移民にうちかつたことを、より以上に可能ならしめた。この意味において、この時期の労働者にたいする『安全弁』としての移動するフロンティアの効果は、疑うことはできない」と。(Henry Pelling, *American Labor*, Chicago, 1960, P.45)

## 八、あとがき

結論的にいうならば、『安全弁』の作用は間接的なものにすぎない。レイ・アレン・ピリンググトン氏は、そのアメリカ・フロンティアについての詳細を極めた最新の研究のなかで、その点を次のように簡潔に描いている。

「……フロンティアの機会を利用せんと望んだものは、おそらく多かつたであろうが、そうしなしたものは皆無であつた」<sup>(1)</sup>  
「ほとんどの新しい地域を占有したのは、近隣地方からの訓練された農民たちであつて、かれらは、新たに安く生活を始めるための開拓技術か、または土地をして生産をおこなわしめるに必要な資本のいずれかを有つていたことは、ほとんど疑いない。だが東部より西部の土地への農業労働者の絶えざる流出は、東部に影響を及ぼさずには済まなかつた。西部へ向けて流れていつた多くのものは、もしそうしなかつたならば、工場仕事を探しに都市へ入りこんでいたであろう。フロンティアは、潜在的労働者を排出することによつて、十九世紀前半には『安全弁』として作用した。が南北戦争後の時代には、開拓地域と産業地域との間の開きが広まるにつれて、その影響すらもが減退した。ミシシッピの彼方のフロンティアは、産業の東部からよりはむしろ近接する農業地域から、その定住者を集めたのである。アメリカの西漸発展の歴史をつうじて、富と技術と距離に恵まれたる農民こそが、平均的なフロンティア人であつた」<sup>(2)</sup>

と。右の一節は、この論文の結びの句としても適当しいものようである。

けれども、最後にいささかフレデリック・ターナー教授を弁護しておく必要がある。批判者たちはかれの仮設をうち破るのに性急なあまり、その仮設の設定された事情を無視していたようである。この意味でヘンリー・スミス氏は、かなり慎重だつたようである。文明が未開の荒野と接するところで絶えず生ずるところの人と社会の再生

いわゆる「安全弁説」《Safety Valve Theory》について (小林)

六六

(rebirth and regeneration) というものが、ターナーのフロンティア仮設の骨子をなしたのであるが、スミス氏によれば、

「再生は経済分析よりはむしろ神話の領域である。しかし普通にはターナーは、かれの隠喩をコントロールし、それを構造的原理もしくは認識手段としてよりは、むしろ自己の論理的命題を説明し、かつ生き生きとせしめるために用いたのである。すなわちかれは、それを修辭的に用いたのであつて、詩的ではなかつた」<sup>(3)</sup>

のである。その例は、この論文の第三章の第一節「フレデリック・ターナーの安全弁説」のなかに引用されているターナーの二つの文章、とくにその後者である。そこで用いられたところの

「魔法の泉という言葉は、理性的構造を有する節の末尾にある修辭的裝飾にすぎなかつた………しかし、ときには、とくに神秘的な力の源泉としての自然という概念がいとも生き生きとだされる場合には、ターナーの隠喩は、それ自体認識の手段となり、推論にとつて代るおそれがある………」<sup>(4)</sup>

のである。とはいふものの安全弁説が、まったくの隠喩でしかなかつたというのは正しくない<sup>(5)</sup>。少くともそうは考えられない。しかしターナー教授の仮設のこの限界は、安全弁仮設を考える場合には、忘れてはならないものである。

なお安全弁理論が「両刃の剣」(a two-edged weapon)であつたという主張は、<sup>(6)</sup> はなはだ興味深い。いかにもありそうなことである。たとえばマコーレー卿の書簡やメルヴィルの作品に、<sup>(7)</sup> 安全弁説の反民主主義的性格がみいだされうるといふ。けれども両刃の剣というのは一つの事物の両面にすぎず、問題はその事物そのものの究明であつた。この論文の目的もまたそうであつた。その意味では、果されるべき目的は、ほぼ果されたのではないかと思

われる。

- 註 (1) Ray Allen Billington, *Westward Expansion: A History of the American Frontier*, New York, 1960, P.9
- (2) *Ibid.*, P.10 には「フロンティアの影響が間接的とすれば、アメリカ労働者の状態にもつと直接的に作用したものは何であらうか？この点についても、各論者の意見は一致している。グッドリチとデヴィンソンによれば、「もし当時のアメリカの賃金労働者が実際に他国の労働者よりも広範な機会をもつていたとするならば、それは遙かなるフロンティアの存在よりは、工業部門の雇傭の急速なる増大によつて、より多く説明がつくものと考えられよう」(Goodrich and Davison, *op. cit.*, 1936, P.116)と。またダンホフ教授は「新しい農業地西部へ多額の富が移動したにもかかわらず、かの若い東部産業の経済が急速に発展し続けた能力は、本質的には、東部産業の生産力と収益力とが高賃金を可能ならしめたという事実を証明した」(Danhof, *op. cit.*, P.359)と。ヨゼフ・シュムペーター教授の見解も同様である。すなわち「フロンティアの存在が軋轢の可能性を大いに縮減せしめるに与つて力のあつたことは云うまでもない。もつともこの要素の重要性は、成程軽視しえないものではあらうけれども、一般にはどうも過大に評価されているようである。むしろ急速なピッチでの産業的発展が不断に新しいフロンティアを創造して行つたのであつて、この事実の方角、家をたたんで西部に移住するという機会の存在よりもはるかに重要なものであつた」と。(ヨゼフ・シュムペーター、「資本主義、社会主義、民主主義」中山・東畑訳六〇三頁)。
- (3) Henry Nash Smith, *Virgin Land*, 1957, P.297
- (4) *Ibid.*, P.297
- (5) グッドリチとデヴィンソンはいう。ターナーの後継者たちのなかには、ターナーの安全弁説の意味は象徴的なものすぎないというものがあり、その限りではそれは否定できない。しかしターナー自身はそうは考えていないだろう。「安全弁」としての西部というとき、かれは「おきらかに現実の賃金労働者の具体的な移動を考えていたと思われる。」(Goodrich and Davison, *The Wage-Earner in the Westward Movement*, I, 1935, Pp.162~163)
- (6) Henry Smith, *op. cit.*, P.240 「その真偽はともかくとして、その理論は両刃の剣であつた。その理論は、窮乏者や被搾取者のために機会を開放せんとした人道主義的改革論者たちの掌中においては、またはその版図の急速な発展を助長する「安全弁説」『Safety Valve Theory』(小林)

いわゆる「安全弁説」《Safety Valve Theory》(小林)

六八

せんと欲した西部人にとつては有用であつたが、それは、国家の将来の繁栄は、定住のために開かれたる土地の利用可能性のいかんによるといふことを意味するといふ欠点があつた。」もし自由地が限界に達した場合は、どうなるか? 「安全弁理論は、こうした事情のもとでは、アメリカ社会も人口溢れるヨーロッパのごとくなることを意味した。そして合衆国の未曾有の幸運を説く人々によつて、不快なほど力づくよく描かれてきたところの旧世界の疾患は、新世界の疾患とならう。」アメリカ人も『ヨーロッパにおけるがごとく大都会に堆積され、またヨーロッパでしかるがごとくに相食むいたる』(一七八七年パリよりジェームス・マディソンに書きおくれたジェファアソンの手紙) ことになる。そして『まず第一に無秩序と略奪とが来り、次いで各派の斗争と内乱が、最後には軍事独裁が来り、無秩序と強奪との耐えがたき悪のために、すべてがその独裁の手中へと追いやられるであらう』(Thomas R. Dew of William, 1836) と。

(7) *Ibid.*, P.243 マコーレー卿が一八五七年にジェファアソンの伝記者宛に認めた有名な書簡は、つぎのようである。「シーザーのごとき人物もしくはナポレオンのごとき人物のいづれかが、強力に政權を奪取するであろう。さもなくば、あなたの共和国は、ローマ帝国が五世紀においてそうであつたごとく、二十世紀において、野蛮人のために恐ろしいほど略奪され、荒廃せしめられるであろう。この相違は、ローマ帝国を破壊したフン族やヴァンダル族が外部より来たのにならう、あなたのフン族やヴァンダル族は、あなたの国自身の制度によつて、あなた自身の国に生ぜしめられるだらうといふことである」と。いわばここでは、西部は、貧者のありうべき暴力にたいする富者の財産保護の安全弁と考えられているのである。(おわり)